

### (35)2010 年の異常な夏

今夏、日本列島は連日、猛暑に襲われた。人間の体温に近い摂氏 36 度から 38 度という猛烈な気温が日中続き、熱中症のため救急車で運ばれる高齢者が多数に上がったことが毎日のニュースで報じられた。最低気温が 25 度以上という熱帯夜も続いたため、エアコンを 1 日中つけっぱなしにしている家庭も多かったようだ。一方で、高齢者の中には、エアコンを持っていないか、エアコンの冷気が体を冷やすからという理由で使わない人も多いようで、このため体温調整ができず、熱中症が原因で死亡する人も多数に上がったようだ。

快適な住環境を維持するためには、エアコンなどの物理的な住居空間を整備するだけでなく、高齢者世帯に対するサポート体制を整備することが必要である。異常気象時には、高齢社宅を訪問し、熱中症に対する対策をこまめに点検、相談する体制を整えることが重要だ。介護保険の内容にこうした熱中症対策を加えることも一案だろう。

天候をはじめとする環境の変化は、高齢者という弱者にまず影響を及ぼす。中でも、健康上の理由だけでなく、家庭や社会から疎外、排除された高齢者が環境悪化の犠牲者になりやすいといえよう。

2010 年の夏のもう 1 つの異常現象は、100 歳以上の高齢者の生存確認が全国で取れていない問題が発生したことである。高齢者の生存確認は、住民票、住民基本台帳、戸籍簿登録などで消滅・削除していなければ生存しているとみなされる。つまり、死亡届を自治体に提出しなければ生存しているとされるのであるが、どうやら家族などの関係者が何らかの理由で死亡届を出していないようなのだ。たとえ、家族などから死亡届が出されていなくとも、民生委員による高齢者への訪問・確認や介護保険の利用状況などから生存を確認できる方策もあろう。

家族から死亡届が提出されていない理由を大きく分けると、高齢者本人の行方不明と家族が親の年金給付金を不法受給していることが挙げられている。前者は一種の「姥捨て山」であり、また、後者は相続と社会福祉の谷間に生じた不法行為であり、現代の貧困問題を象徴する問題といえよう。

奇しくも 2010 年の夏に生じた異常な環境と高齢社会の揺らぎの問題は、本格的な高齢社会に入った日本に大きな問題を投げかけたといえよう。

以上